

第17回エコプレミアムクラブ ネットシンポジウム

POSSIBLE VS IMPOSSIBLE

2020年8月5日

中部大学経営情報学部

細田衛士

若干の哲学的考察

**「理性的なものは現実的であり、現実的
なものは理性的である。」**
『法哲学』ヘーゲル

ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル

(1770~1831)

- ヘーゲル哲学はいわばドイツ観念論の集大成のようなもの。ヘーゲルは、歴史とは世界精神の自己展開過程であり、それは究極には絶対精神に至ると考えた。
- 「皇帝が一この世界の精神が敵地偵察のために馬上ゆたかに街を出ていくのを見ました。このような個人を目の当たりに見ることは、じつに何とも言えない気持ちです。」（イェーナでナポレオンを見たヘーゲルの言葉）

現実性と可能性

- 現実的なものは可能的だし、可能的なものは現実的になり得る。
- とすると、ヘーゲルの言葉はこうにも言い換えられる。
- 「理性的なものは可能的なものであり、可能的なものは理性的である。」

非理性的なものと不可能性

- とすると、非理性的なものは不可能であり、不可能なものは非理性的なものである、ということになるのか。
- とすると、可能性の限界を広げることは、理性の限界を広げることになる。
- 果たしてそうなのか？

理性的なものと可能性

可能的なもの

理性的なもの

窃盗は可能であり
現実にもあるが、
理性的ではない

理性的であることは
可能的であることの
十分条件、必要条件
ではない

だとすると、現実的
なものは必ずしも理
性的であるとは限ら
ないことになる

「可能的なもの＝理性的なもの」 にするには

- 「可能的なもの＝理性的なもの」とする（すなわち前のページの図の隙間を埋める）ためには、理性に加えて共感そして感性が必要。
- 現代に最も欠けているもの、それは共感と感性。
- コロナウイルス災禍でもそのことが証明された。

若干の経済学的考察

可能性を制約する諸要因

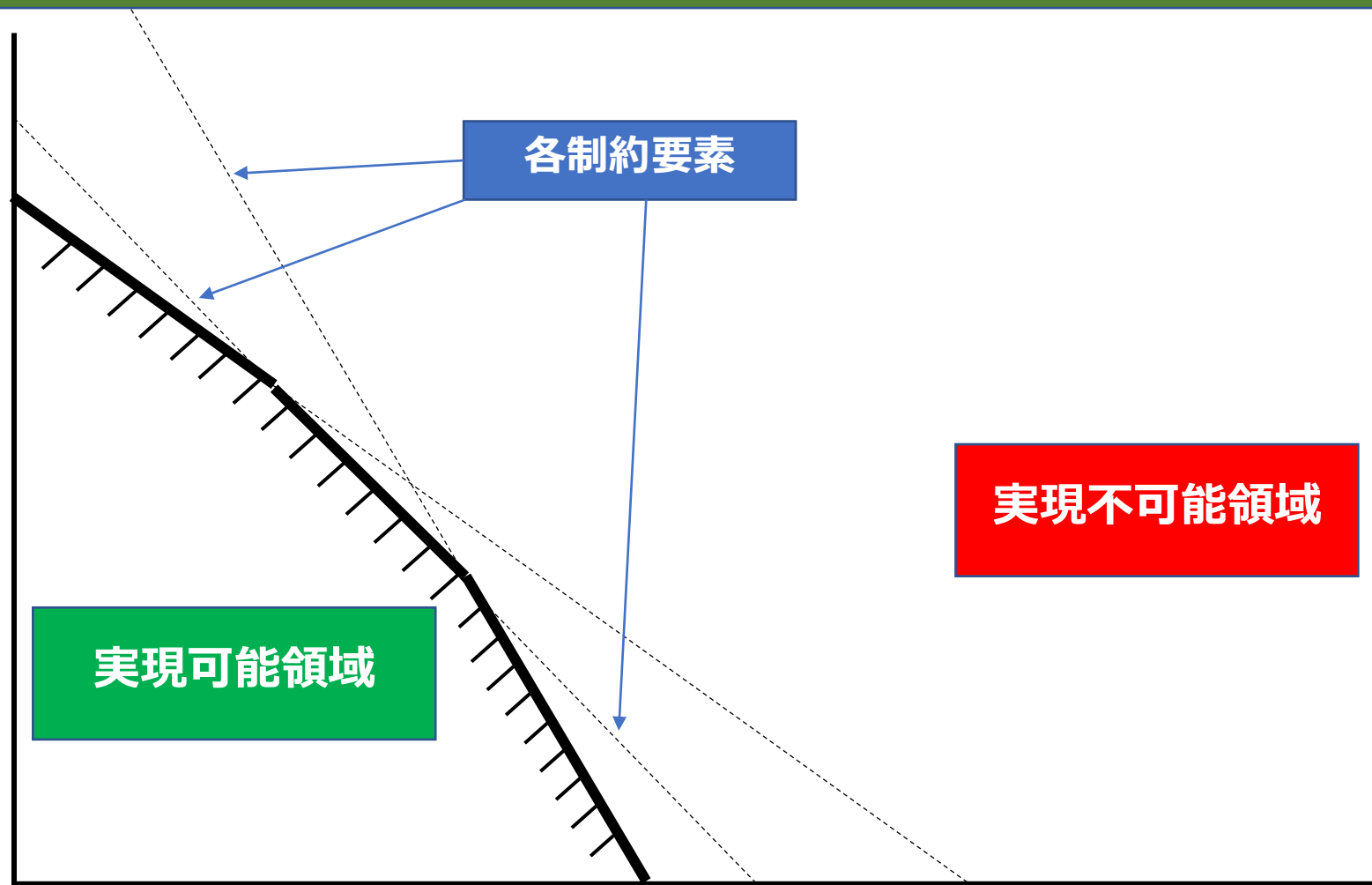
- 可能性を制約する（すなわち不可能とする）制約要因
- 理論的制約：光より早く飛べない
- 技術的制約：光子ロケットは作れない
- **経済的制約**：海洋プラスチックゴミをゼロにできない
- 主観的制約：「そんなこと、とても言えない」
- 確率的制約：井川遥とデートできない
- 時間的制約：原稿締め切りに間に合わない
- 空間的制約：これ以上地球に人は住めない（？）

コラム

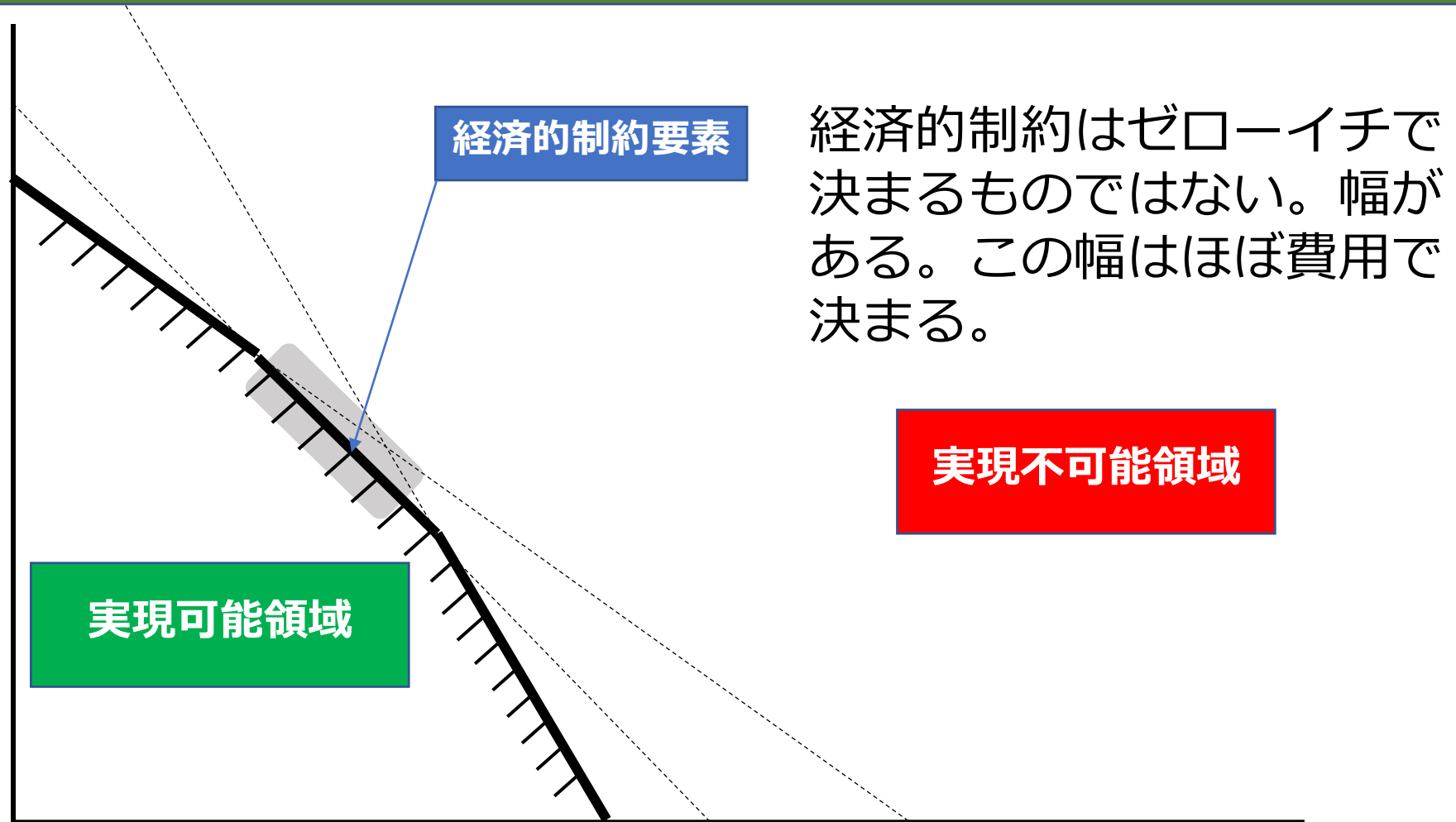
以下のことは絶対に *IMPOSSIBLE!*



制約は多重に拘束的（１）



制約は多重に拘束的（２）



経済的制約はゼロイチ的ではない

海ごみのストックを
減らす限界費用

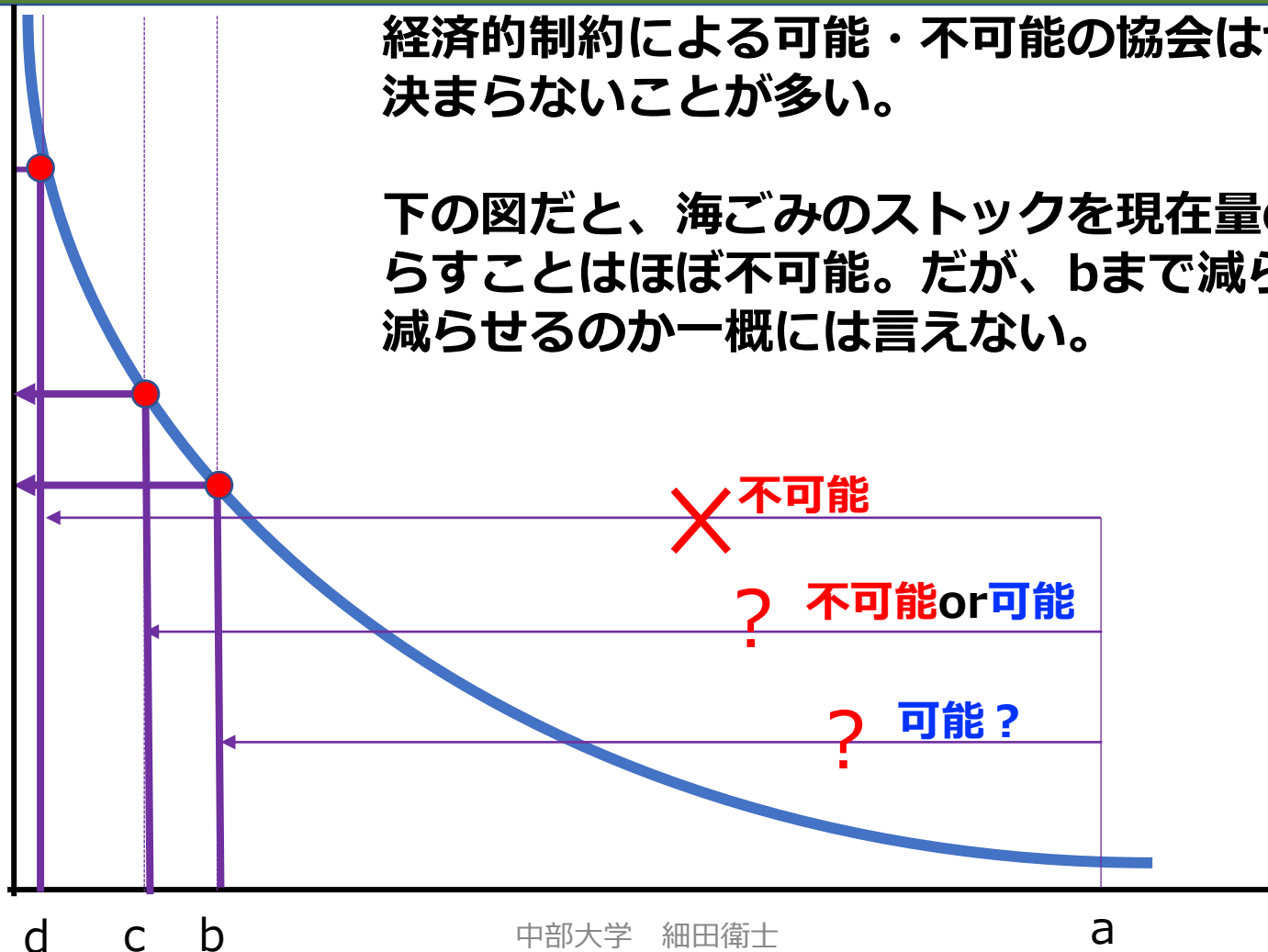
費用高過ぎ

費用やや高い

費用少し高い

経済的制約による可能・不可能の協会はゼロイチ的に
決まらないことが多い。

下の図だと、海ごみのストックを現在量のaからdまで減
らすことはほぼ不可能。だが、bまで減らせるのかcまで
減らせるのか一概には言えない。



海ごみのストック

14

経済的制約は時間とともに変わる

海ごみのストックを
減らす限界費用

費用やや高い

費用少し高い

費用高くない

技術・社会経済システムが変われば、曲線はシフトする。従来経済的に不可能であったものが経済的に可能になり得る。

× 不可能

? 可能?

十分可能

d

c

b

中部大学 細田衛士

a

海ごみのストック

15

それでは何が経済的実現可能性を高めるのか

- 2年前のエコプレミアムシンポジウムを思い出していただきたい。
- お題は「イノベーション・Innovation」。
- イノベーション・Innovationが不可能を可能にする。

3つのイノベーション

(2年前のスライドから)

- 技術的イノベーション (technical innovation)
- 組織的イノベーション (system innovation)
- 人的イノベーション (human innovation)
- この3つを同時に行うことによって費用曲線を下方にシフトさせ、実現可能性を高める。

共感・感性と多様性

組織的・人的イノベーションを もたらすために何をすべきか

- そこに必要なのは共感と感性。
- 共感なき経済は無慈悲であり、経済なき共感は無意味である。
- そして感性が全体性を掴み取る。

共感・感性と理性

(2年前のスライドから、多少加筆修正)

現在はこれらの領域の
力を付けることがより
創造力の向上に資する

想像力・創造性

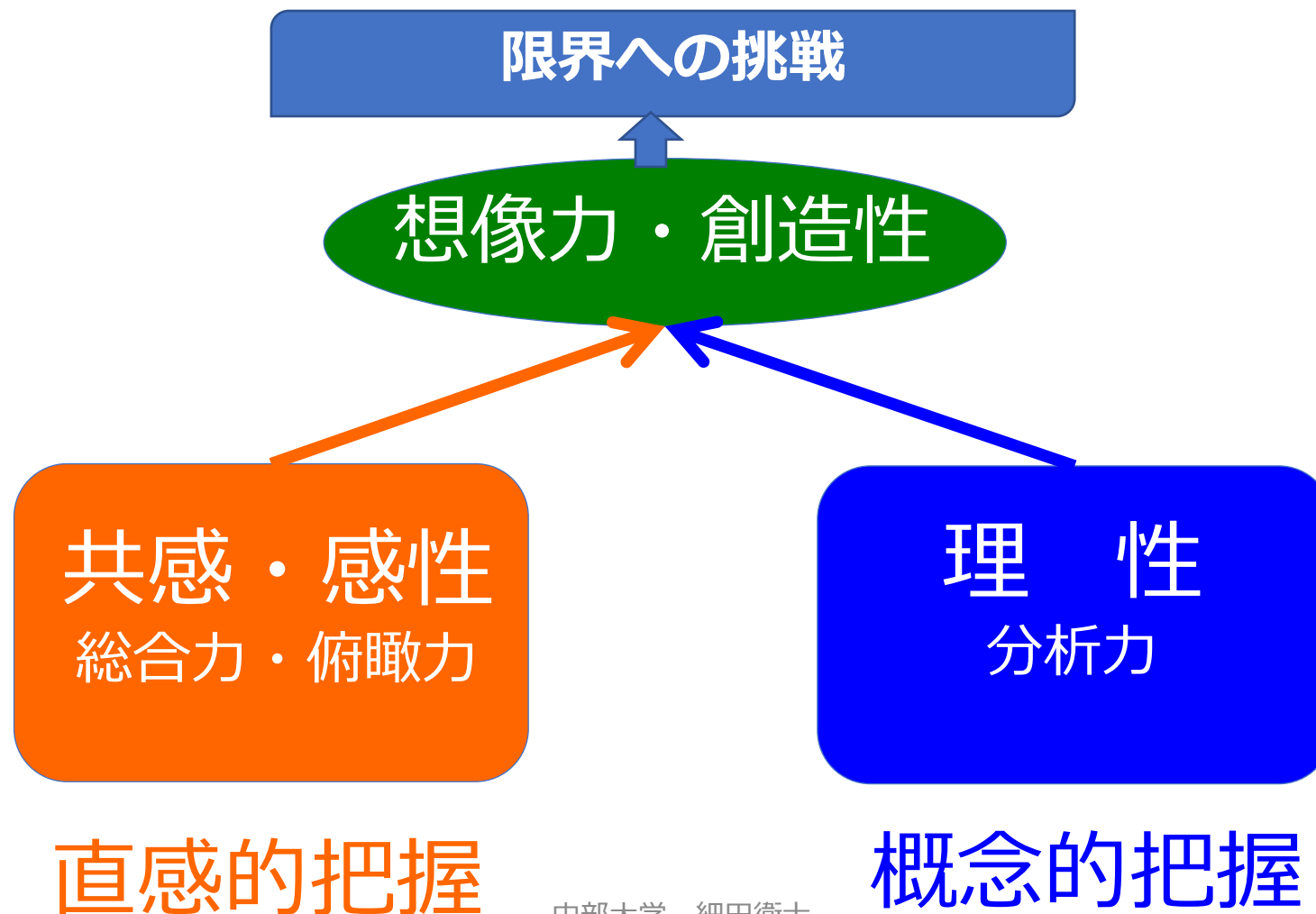
共感・感性
総合力・俯瞰力

直感的把握

理 性
分析力

概念的把握

限界への挑戦

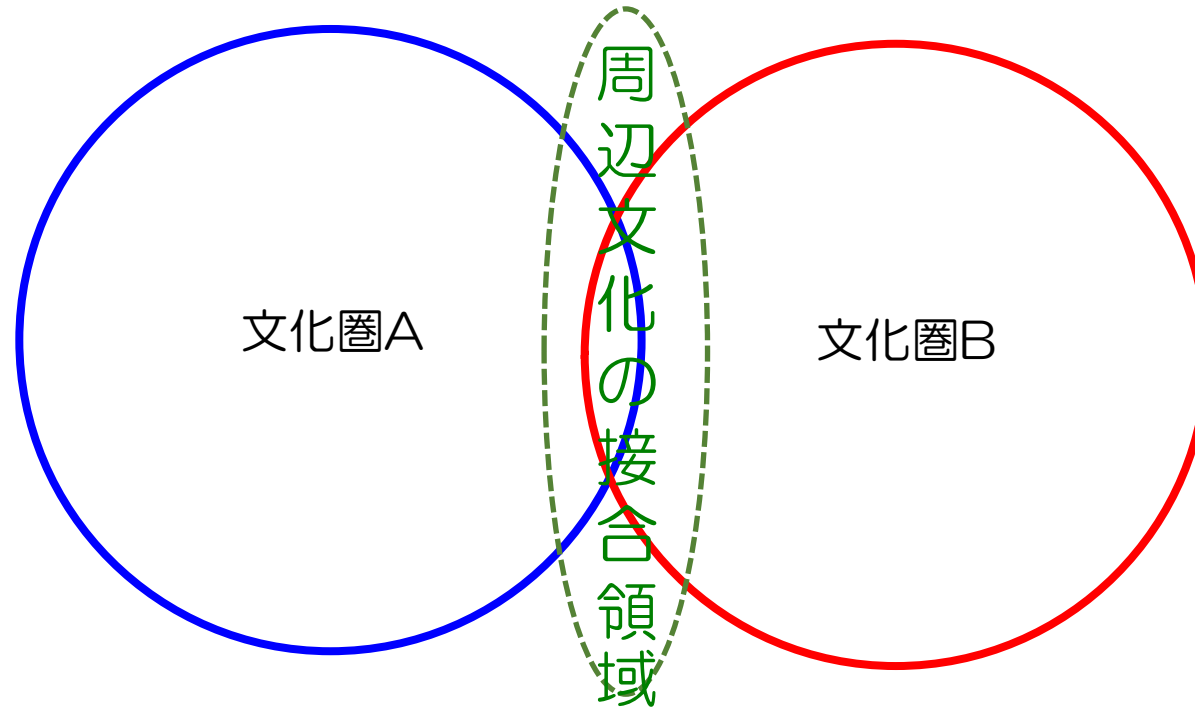


共感力・感性力を高めるために

- 2年前は「美」の重要性を強調。
- 今年はこれに加えて「多様性」を強調する。
- 多様性は共感力・感性力を高め、共感力・感性力は多様性を豊かにする。
- Cf. なぜアメリカ合衆国があれだけ豊かになったのか、なぜ限界を超えてきたのか。→多様性！

周辺革命論

(2年前のスライドから、多少加筆修正)



文化圏の中心ではなく異文化圏の周辺
領域で新たな文化が展開する→多様性
が新たな文化を生み出す

単一的であることの危険性

- 生態系は多様であるほどresilient。
- 単一だと絶滅均衡に収束する可能性が高い。
- 自然の相が豊かだとそもそも楽しい！
- 「鈴と、小鳥と、それから私。みんなちがって、みんないい。」（金子みすゞ）

最後に不可能性について

- ネットで「不可能性」を検索すると、アロー（ノーベル経済学賞）の「不可能性定理」が真っ先に出てくる。
- これは社会的選択に関わる重要な定理。
- 「『公正さ』の基準を常に同時に満たすような選好順位選挙制度は設計できない。」というものの。
- つまり社会経済システムに関わる定理なのである。

一つの大きな難問

- ここに大きな問題が出てくる。
- 多様な個人が多様な選考を持つ経済社会では、アローの不可能性定理が妥当する可能性が高い。
- 直感的に言えば、「公共善」「社会正義」などを人々の選好の積み上げからは導けないかもしれない。

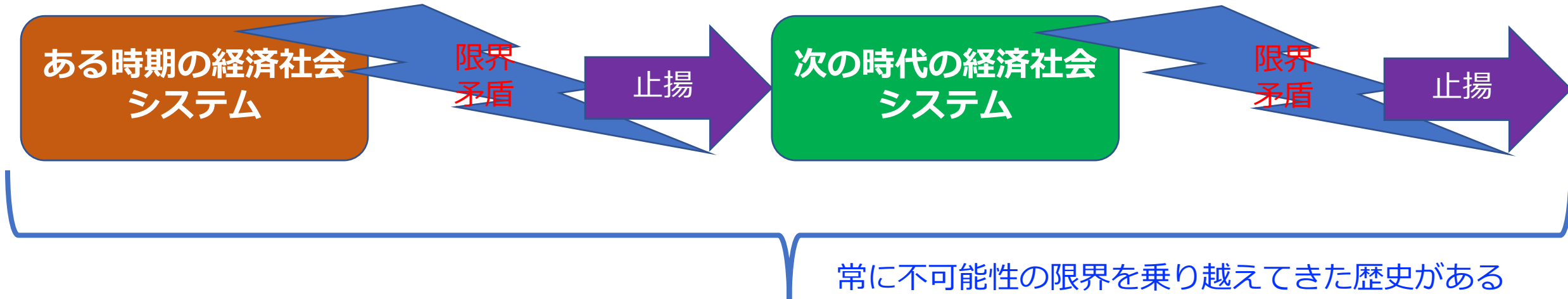
おわりに：再び哲学的に

弁証法的に考えると（１）

- ヘーゲルに戻ろう。
- 社会経済システムは常に矛盾を孕み、それを止揚するすることによってダイナミックに動いている。
- 決して静態的ではない。
- 仮に「公共善」「社会善」は見いだせずとも、それを追い求めて、社会経済システムを改革し、可能性のフロンティアを拡張することができる。

弁証法的に考えると（２）

経済社会システム、またはその歴史



弁証法的に考えると（３）

- ヘーゲルのように無邪気に世界精神が絶対精神（理性の極限状態）に至ると信じることはできない。
- しかし、可能性の限界への挑戦は必要。
- そしてこの、矛盾→止揚→矛盾の道筋を人倫に適ったものとするためには、理性の他に共感と感性が必要。

コロナ禍のなかで

- コロナ禍のなかで世界は悲観的な様相を呈している。
- 1348年、ヨーロッパはペスト大流行に見舞われた。
- しかしそのなかでも、ボッカチオ、ペトラルカ、ギベルディ、ブラマンテ、そしてダビンチなど続々と優れた芸術家が現れた。
- ルネッサンス（ヒューマニズム）の到来である。

そこで響いてくるのがこの言葉

「ミネルヴァの梟は日暮れて
飛び立つ。」

『法哲学』ヘーゲル